

2012年3月22日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 真理へ導く工夫

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「譬諭品」

### 1. 譬諭品の概要

- (1) 舍利弗に授記を与える
- (2) 三車火宅の譬えが、長行（じょうごう、経文のうち散文で書かれた部分）と偈頌（げじゆ、詩、経文のうち詩句で書かれた部分）で、繰り返されます。

### 2. 三車火宅の譬え

#### (1) 荒れた家

ある国のある町に、大きな長者がありました。

その家やしきは広大なものでしたけれども、門はごく狭いのがひとつしかありませんでした。

しかも、家はたいへん荒れはてていました。

#### (2) 火事に焼かれそうな子どもたち

その家がつぜん火事になりました。火はみるみる燃えひろがりました。

家のなかには長者の子どもたちがおおぜいいるのです。

外にいた長者がおどろいてひきかえしてきてみると、子どもたちは夢中で遊びたわむれているではありませんか。火に焼かれそうになっているのに、いっこうに気づかず、したがって、逃げだそうという気も起こさない様子なのです。

#### (3) 大力で救おうか？

長者はそれを見て、一瞬考えました。自分には大力があるから、なにか箱のようなものにみんなを乗せて、一気に外へ押し出して救おうか。しかし、すぐ考えなおしました。待てよ、それでは、こぼれ落ちたものは焼け死んでしまう。

#### (4) 火の恐ろしさを知らせよう！

やはり、火の恐ろしいことを知らせて、自分から外へ出るようにしむけるのが第一だ。

そこで長者は、大声で「このままでは焼け死んでしまうぞ。早く外へでなさい」と教えてあげましたが、子どもたちは長者の顔をチラリチラリと見るだけで、問題にしません。

#### (5) 門の外に車があるぞ！

そのとき長者は、ふと、子どもたちがいつも車を欲しがっていたのを思い出しましたので、「おまえたちの好きな、羊のひく車や、鹿のひく車や、牛のひく車が門の外にあるぞ。欲しいのをあげるから、早く行ってとりなさい」と叫びました。

子どもたちは、そのことばを聞くと正気にかえって、それいけとばかり、われ先に走りだし、燃え盛る家から出ることができました。

(6) すばらしい車を与える

父の長者は、みんなが怪我なく脱出したのを見て、やっと安心しました。

子どもたちは父のすがたを見ると、口々に約束の車をせがみます。

すると父の長者は、子どもたちが欲しがっていた車ではなく、大きな白い牛の引く、しかも多くの宝ものに飾られたすばらしい車を、みんなにひとしくあたえたのであります。

(『法華三部経 各品のあらましと要点』p.43～45)

### 3. 譬えの意味

(1) 長者

長者は、仏さまです。真理を生きる人です。

家が長者のものだというのは、世界は真理によって生かされていることを示しています。

(2) 荒れ果てた家

荒れ果てた家というのは現実の人間社会をさしています。

真理を知らず、精神の自由自在さを失い、自分本位を振り回しながら生きている人々の心は荒れ果てていると言わざるをえません。

そのような人々が争い合いながら生きている人間社会が、荒れ果てた家です。

(3) 遊びまわる子供たち

夢中になって遊んでいる子どもたちは、自分本位の心でいながら、幸福を求めて一生懸命に生きている人々のすがたです。

(4) 火事

火事は、私たちの煩惱のことです。自分本位の欲望・執着心・我がままなどが、自分の心を真理から遠ざけ、人生を壊していくさまが、しばしば火事に譬えられます。

### 4. 凡夫

(1) 凡夫

資料に「子供たちはわれわれ凡夫」とあります。「凡」は「ありふれた」というような意味ですが、仏教で「凡夫」というときは「愚かな人」という意味になります。真理に生かしてもらいながら、真理を知らず、真理から外れた振る舞いに明け暮れる人と考えればいいでしょう。

(2) 自由自在

なにものにもとらわれることのない、のびのびとした安らかな心身の境地と、そこから現われるとらわれないはたらきを自由自在と言います。

### (3) 自由自在を失う

凡夫は、自分にとらわれ、人の言葉にとらわれ、ものごとにとらわれ、その中で煩惱を燃やして苦しみます。このため、精神の自由自在を失い、その上、自分が精神の自由自在を失っていることに気づくことすらできません。

このような人々は、自己主張が通ること、わがままが通ること、自分の言うことを人が聞くこと、欲望が思い通りに満たされることなどを、自由自在と勘違いしたりします。

## 5. 「救い」について

### (1) 「救われる」とは

真理を知らず真理を实践できない状態から、真理を知り真理を实践できる状態になることを、救われると言います。

### (2) 勘違い

自分の欲望や本能が満たされること、わがままが通ることなどを救いと考える人がいますが、これは勘違いです。

古来から、勘違いの救いを求めて、低劣な信仰に走る人々が数多くいます。

## 6. 仏と衆生の関係

### (1) 長者と子どもたち

子どもたちは衆生、長者は仏さまです。妙法蓮華経では、「三車火宅の譬え」のほかに「長者窮子の譬え（資料p.58）」「良医治子の譬え（資料p.157）」が、「仏さまと衆生は親子である」と語っています。

### (2) 経文

妙法蓮華経では、仏弟子たちをしきりに「仏子」と呼んでいます。ここからも、仏と衆生は親子であるという思いが流れていることがうかがわれます。

## 7. 長者の苦心惨憺

火事にやかれそうになっている子どもたちを救うために、長者は苦心惨憺します。

ここでは、三つの方法が考えられたり試みられたりします。

## 8. 長者が考えた第一の救い方

### (1) 箱に乗せて押し出す

長者は子どもたちが火事に気づかず、逃げようとしぬいぬいを見て、考えました。「自分には大力があるから、なにか箱のようなものにみんなを乗せて、一気に外に押し出して救おうか」。

しかし、むりやり箱に乗せられた子どもたちは、箱からこぼれ落ちたり、飛び下りたりすることが考えられます。このため、この方法は用いませんでした。

### (2) 他力の救い

これは「他力の救い」です。とにかく人々に真理の実践をさせるのです。ときには強制することもあります。しかし、本人が自覚していませんから、長続きしません。

## 9. 長者が考えた第二の救い方

### (1) 火の恐ろしいことを教える

長者は「火の恐ろしいことを知らせて、自分から外へ出るようにしむけるのが第一だ」と考えました。そこで大声で「このままでは焼け死んでしまうぞ。早く外にでなさい」と、子どもたちに教えてあげましたが、子どもたちは長者の顔をチラリチラリと見るだけで、問題にしません。

### (2) 自分に当てはめない

子どもたちすなわち凡夫は、仏の教えと自分たちの関係が分かりません。

多くの人々が、仏の言葉を聞いたとき、良い話だ、その通りだと言いながらも、自分に当てはめて考えることをしません。まして、実践しようなどとは思いません。

### (3) 他人に当てはめる

煩悩に生きる人は、良い教えを聞くと、他人に当てはめて、他人を非難する道具に使うことがあります。そのために、煩悩がますます深くなってしまいます。

## 10. 長者が考えた第三の救い方

### (1) 車を求めて外に出る

長者は、子どもたちがいつも車を欲しがっていたのを思い出しましたので「お前たちの好きな、羊の引く車や、鹿の引く車や、牛の引く車が門の外にあるぞ。欲しいのをあげるから、早く行ってとりなさい」と叫びました。

子どもたちは、その言葉を聞くと正気にかえって、それいけとばかり、我先に走りだし、燃えさかる家から出ることができました。

## (2) 教えを聞いて実践する

人々は、心に触れる教えを聞くと自分から学び実践することがあります。学んだ教えによって真理に導かれれば、その人は真理の道を歩むようになります。これが救われです。

仏は、一人一人にぴったりする教えを説きますから、聞いた人は心を動かされて真理の実践に向かうのです。

### 1 1. 羊車、鹿車、牛車

#### (1) 人間の型

人間にはいろいろな型があります。その型に応じた教えを、羊のひく車（羊車）、鹿のひく車（鹿車）、牛のひく車（牛車）と、表現しました。

#### (2) 声聞型

羊車（ようしゃ）を求めて家の外に出る子どもは、いい教えを一心に聞いて迷いを去ろうとつとめる声聞型の人を表しています。

#### (3) 縁覚型

鹿車（ろくしゃ）を求めて家の外に出る子どもは、自分ひとりで瞑想・思索して道をきりひらこうとする縁覚型の人を表しています。

#### (4) 菩薩型

牛車（ごしゃ）を求めて家の外に出る子どもは、至上の悟りを求めると同時に大衆の救済運動に挺身しようとする菩薩型の人を表しています。

### 1 2. 大白牛車

#### (1) 大白牛車を与える

子どもたちが車を求めて家の外に出ると、子どもたちが欲しがっていた車ではなく、大きな白い牛のひく車、しかも多くの宝物に飾られたすばらしい車を、みんなにひとしくあたえたのであります。

#### (2) 大白牛車とは

大白牛車（だいびやくごしゃ）は、仏になる道を表しています。

それぞれの人に応じて適切な教えを説き、煩惱に生きる生き方から抜け出させたのは、仏になる道すなわち真理に生きる道に導き入れるためだったのです。

### 1 3. 狭い門

#### (1) 我を捨てる

広大な家に狭い門がひとつとなっています。「狭い門を出る」とは、「我を捨てる」ということです。我を捨てるのはたいへん難しいことなので、狭い門とってあるのです。

#### (2) 第一段階の「我を捨てる」

自分に貪欲があるから、苦しみが生じるのだ。貪欲を捨ててしまえばいいのだ。そう思って貪欲を押さえよう捨てようと努力すれば、かなり我から離れることができます。

#### (3) 第二段階の「我を捨てる」

ものごとはすべて原因と条件によってできている、自分も原因と条件によってできていると理解し、原因・条件・結果・影響の原理を知って、人と調和しながら向上する道を求めるようになれば、自分本位の我は消えていきます。かなり高い段階です。

#### (4) 第三段階の「我を捨てる」

「この宇宙のすべての存在はもともと平等であり、大調和しているのだ」という真実を悟ることができれば、自分も他の人々も、みんな同じ仏の子なのだ、兄弟なのだ、芯から感じるようになるようになり、我などというものはどこにもなくなってしまいます。

### 1 4. 「他に導かれる」という他力

#### (1) 実行させられる

本人の自覚がないまま、指導者から教えを実行させられることです。何も分からないけれど指導者を信じて実践し、それが真理の実践であれば、真理に合った結果が得られます。

この方法は、緊急の場合、切羽詰まっているとき、本人に理解力がないときなどに、意図的に用いられることがあります。

#### (2) 自覚がない

この方法は、自分が真理を実行しているという自覚が伴いません。このため、ことが治まるともとの迷いの状態に戻ります。

#### (3) 煩悩を盛んにする

本人の自覚がないままの実践であること、原理が分からないままに良い現象が出ることなどから、貪欲を刺激してますます煩悩を盛んにしたり、教条的な方法論に走ることがあります。

#### (4) 指導者の選択

指導者の選択を誤ると、誤った道を教えられ、誤った道を一生懸命に歩むようなことにもなりかねません。

### 1 5. 「他が救ってくれる」という他力

- (1) 神さま仏さまにお願いして、願いを叶えたり、問題を解決したりしてもらうという他力があります。自分は、神仏にお願いする努力はしますが、願いの実現のための正しい努力、問題を解決するための正しい努力はしません。
- (2) 子どもの願いを考えなしに満たしてあげる親、子どもの起こした問題を子どもに責任を取らせることなく解決してあげる親がいます。子どもの立場からは、これは「他が救ってくれる」たぐいの他力です。

このように育てられたために、わがまま放題をやりながら責任を取らない生き方が当たり前になり、身を滅ぼした例が数多くあります。

### 1 6. 自力の救い

- (1) 自分の意志と努力でものごとを行う態度は、価値ある態度です。自主的な態度と言ってよいでしょう。
- (2) 真理を知らず、自分本位に満ちた人が、自分の考えに基づいて、自分の意志と努力でものごとを行うと、真理から外れてしまう危険性があります。

### 1 7. 自力・他力の救い

- (1) 真理を学び、真理に沿った考え方、行い方を学んだ上で、自分の意志と努力でものごとを行うことができれば、意図的に真理の道を歩むことができます。
- (2) 「自分を真理に合わせて、あとは真理に任せる」といういきかたが自力・他力の救いです。

## 【参考】

## 1. 有名な偈

## (1) 経文

いまこ さんがい みなこ わ う そ なか しゅじょう ことごと こ わ こ しか いまこ ところ  
 今此の三界は 皆是れ我が有なり 其の中の衆生は 悉く是れ我が子なり 而も今此の処  
 は もろもろ げんなんおお ただわれいちにん よ くご な  
 は 諸の患難多し 唯我一人のみ 能く救護を為す

## (2) 現代語訳（『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 52）

この宇宙は全部わたしのものだ。万物・万人はすべてわたしの子だ。その子どもたちが苦しみ悩んでいるのを救うことのできるのは、わたしひとりしかないのだ。

## 2. 経文の真意（同p. 53～54）

## (1) すべてのものに生かされている自分

われわれが、ほんとうに我を捨てることができれば、かならず、すべてのものに生かされている自分を発見することができます。そしてすべてのものすなわち、宇宙全体に生かされている自分をしみじみ見つめることができれば、自分がみるみる宇宙全体にひろがっていくのです。

## (2) 心は自由自在

そうなると、心はまことに自由自在です。なにごとにもとらわれず、おもうようにふるまっても、それがすべて真理にかなない、自分をもすべての人々をも生かす行為になってしまうのです。

## (3) ほんとうの大慈悲

また、宇宙がわがものであれば、したがって、その中に住む衆生はすべてわが子であり、きょうだいであり、仲間です。だから、それらのために親身になってつくすにはいられないのです。これがほんとうの大慈悲であり、仏の境地にほかなりません。

## 3. 私たちの目的

私たちは、この経文が語っているような境地に向かって、努力を続けたいと思います。